
居候って.....可愛いか？

大月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居候つて……可愛いか？

【Nコード】

N4067I

【作者名】

大月

【あらすじ】

主人公である藤純弥は、部屋がだだっ広く、そこそこなお金持ちの両親の下に生まれたこと意外にさほど特徴のない平凡な男子高校生だ。ただちよつというんなことに巻き込まれやすいだけの。ある日も一人の寂しさから持ち込んだパソコンの画面に向かっていたのだが、そのままの体勢で眠ってしまう。翌朝、彼は一人ではなくなっていた。

それから起こるそれはそれはいろいろな災難などに悩まされながら、徐々に、無秩序に変化していくのだっ広い部屋を中心に彼の高校生

活は大きく変わっていく。

第1話：居候は狐娘

「悪くない寝心地じゃったぞ」

「……………は？」

俺はどうやら畳の上で、胡坐をかいたまま寝ていたようだ。無駄にだだっ広い巨大な和室が俺の部屋だ。そこに生活に必要なものがすべて置いてある。

だだっ広いっていうのは、相当だだっ広い。客船の大部屋くらい広い。そこに一人なわけだから、ちよつと寂しいな、ということを持ち込んだパソコンに熱中してしまい座ったまま寝ていた。すると、いつの間にか一人じゃなくなっていたようだ。足がしびれている。

謎の少女が俺の膝を枕にして寝ていたらしい。

「ふむ、この高さ、程よいかたさ。素晴らしいな、誇ってよいぞ」

「……………は？」

「どうした、さっきとリアクションが変わっておらんぞ」

「……………誰だ、お前？」

「すまんすまん。自己紹介が遅れたな」

ようやく謎の少女が俺の膝から頭を上げて、畳の上に座った。この服は、あれだ。巫女さんが着ていたような袴だ。

「凜香というのが名前じゃが、九尾の狐としてのほうが有名じゃろうな」

「……は？ それ尻尾か？」

なんか足の辺りにふさふさしてる狐色の何かがあると思ったら、そのまま狐の尻尾だったわけか。
なるほどなるほど。

そんなわけねえだろ！ どうせその尻尾もなんかおもちゃみたいなものだろう。

「っ！ なにをするのじゃ！」

「あら……？ これマジで体にくっついてんの？」

尻尾を引っ張ったら少女の方も引っ張られてきた。
こいつマジで狐の妖怪？ いやいやそんなことがあってたまるか。
そう、これは夢なんだ。

もう一回寝よう。そうすれば次起きたときには、この変な少女は消えているはずだ。

「待て待て、なぜ寝ようとするのじゃ？ さては信じておらんかな？ では証拠を見せてやろう。だからこっちを向け」

「ああ……？ もう良いって。夢に付き合ってたれっかって……なぜ服を脱ごうとするんだ！」

いや、これは夢だからいつそ……
つか俺ロリコンじゃねえから！　なんでこんな夢見てんだ？

「……何を慌てておる？」

「あ、なるほど。それが真の姿ってわけね」

普通に狐の姿をしている。
いや別にまったくがっかりなんてしてないけどね。

「では証拠を見せよう。まだ正式に九尾とは成っておらんが、一人吹き飛ばすのは容易い」

「吹っ飛ばす？　てめえ何する気だ？」

「夢だと思っておるのじゃろ？」

「ストップ！　理解した！　これは現実、お前は狐の妖怪だ。なぜここに居るのか説明しようか。そしてその前に服を着て人の姿に戻ってくれ」

「まあいいじゃろっ」

狐が袴をかぶると、どうやってるのか知らないけど、袖から人の手が出てきて、いとも簡単に袴を着こなしている。

結構着るの難しいと聞くけど、これはまた画期的な着脱方法だな。

「じゃあ聞くが、なんでここに居る？」

「人界での修行のためじゃ。九尾の狐は、姿を変えて権力者をだ

ましてその命をすってまた強くなるのじゃ」

「おい待て。じゃあ俺を殺す気が？」

「権力者というのが聞こえんかったか？」

この野郎。

「これはその段階のひとつじゃ。人界にうまく溶け込むことが絶対条件じゃからな」

「いや、俺に正体明かした時点で無理だろ」

「だからおぬしには協力者になってほしい。どうか了承してもらえんかのう」

「そうは言ってもなあ」

「そのためにお人好しそうなロリコンやろつを選んできたのじゃ」

この野郎お願いするつもりねえだろ。

よく物を頼む相手にお人好しそつとか言つよな。つかロリコンでもねえよ！

「純弥。誰か部屋にいるの？」

やべえ！ 家には母さんがいることをすっかり忘れていた。

このままじゃ部屋まで来るじゃねえか！ まあこの小娘一人を完全に隠す程度のスペースは余裕であるが……

こつちから頼みごとをすれば、確実に俺も頼みを聞く羽目になる。

「なるほど、母上か。ではここでわしがロリコンなおぬしに強姦されそうになった事を伝えればどうなるじゃろうな」

「さらつと脅迫するんじゃないやねえ！ つーかなんでしゃべり方は古臭いのになつきからロリコンって言葉はポンポン出てくるんだよ！」

「どれ……襲われ」お願いします、なんでもするんで隠れてください」

この野郎め……

だがそれどころじゃねえ。とりあえず押入れに押し込んでおこう。

「純弥？ あれ、一人？」

「あ、ああ。腹話術の練習してたんだ」

「そのこけしで？」

「そうそう。とりあえず準備するから出て行ってくれる？」

「分かったわ」

母さんは部屋から出て行った。

まあこれでとりあえず脅威は去ったな。なんにしてもあいつがすんなり隠れてくれて助かった。

「にしし、さつきに言葉、忘れたとは言わさんぞ？」

「ああはいはい。男に二言はねえよちくしょう」

つか具体的にやるんだろ。

第2話：狐娘の策

冷静に考えると、困ったもんだなあ。

普通の居候の5倍は厄介な居候だぜこいつ。まあ人間の姿なだけ
ましか、尻尾は2本生えてるけどな。

「えっと、凜香だったっけ？」

「いきなり呼び捨てはどうかと思うがの」

「凜香ちゃん」

「馴れ馴れしい」

「凜香さん、いや待て。お前居候だし」

「おぬしこそ自分の置かれた状況をよく考えてみる。こつして一
夜を過ごした時点で、すぐにもロリコンのおぬしを社会的に殺す
ことができるぞ」

そうなんだ。なんだかんだ一日が終わって、今はこの鬱陶しい狐
が俺の膝を枕にして現れた翌日の朝ということになる。

こいつは態度がでかく、性格が捻じ曲がっている上に、いつでも
俺を殺せるという、非常に困った居候なのだ。その上俺をロリコン
扱いする。

どっちかというとな上が好きだつてのに。

「まあまあそれはいいとして、お前の親はどっかにいるのか？」

「わしの母上は、天上界で神職についておられる」

「神職というと、神様ということか？」

「まあそうなる。九尾の狐は最高位の妖狐じゃからな。その力は神と同等といっても良いほどじゃ」

親が神様つーのはどういう感じなんだろうな。俺には縁がない話だ。

「親父さんは？」

「ただの下界の人間じゃ。母上が下界をぶらついてたところ、襲ってきた人間だと聞いたが、どういうわけかそいつと一発やったそうじゃ」

「まあ伝わったけど、何でそういう言い方なんだよ……」

お前何時代の人間だ？ いや人間じゃないのか。
でも親父が人間なら、娘であるこいつにも半分は人間の血が流れているということだろうな。

「疑問なのじゃが、おぬしは学び舎には行かぬのか？」

「いいんだよそれは。とにかく居候の相手をするほうが大事だ」

「それは違う気もするがのう」

違うないって、学校とかいく意味ないし。つかなんでロリコンを知ってるやつが、学校のことを学び舎っていうんだよ。

「じゃあ本題だけど、お前は何をしたいの？」

「立派な妖狐は人を欺くことからじゃ。人間の男をだませなくて、九尾の狐にはなれんのじゃ」

お前の母さんは、人間の男にうまいこと騙されたんじゃないの？
勢いで一発やってしまったんじゃないの？

まあそれはいいとして、男を騙す術。それがこの女つ気のないただの高校生である藤純弥との生活で身につくとは到底思えないのだから。

「おぬしの周りに、そういうことに長けた女人はおらんのか？」

「そうなるのか。いないでもないけど、クラスのやつだ」

「連れて来てもらえるかのう？」

「無理だ」

「草食系っていつやつじゃのう……」

俺にクラスの女子を家まで連れてくる技量と度胸は備わっていない。
彼女いない暦と、年齢がまったく同じ男子高校生をなめるなよ。

「う、うるせえな！ ちょっと哀れみの目で見てんじゃねえ」

「世も末じゃの。こんな度胸のないちんけな男が一家の長男とは
のう」

「ガツガツ行くやつはこれからの時代無理なんだよ」

「わしの父上などは、人目も気にせず強引に母上に迫ったと聞か
がのう」

多分だけど、そいつは男らしいのでも肉食系でもなくて、犯罪者
だと思う。

「まあ致し方ないか。チキンはいつまでもチキンじゃ」

「このやる……好き勝手言ってくれるな」

「わしが学び屋に行くというのはどうかの？」

「お前は どう見ても中学1年か……下手すれば小学生だぜ？」

「若々しいと？」

「若すぎだぺたんこぐふおお！」

何がおきた？ 景色がゆがむ。そして時間がゆっくりになり、再
生される俺の過去。

おお、去年死んだおじいちゃんが、こっちを見て笑っている。

ガッン！ とすごい音。多分机の角で頭打った。

「イテエー！」

「言葉に気をつけるのじゃな。少女の心は繊細なのじゃ」

乱暴にふつ飛ばしやがってなにが繊細だ。
この国で高校生一人を吹っ飛ばせる輩を、少女なんて言わねーよ。
別に余計なことしなくても、あと5年もすれば黙っていればあほ
な男はふらふらついてくると思うけどなあ。ま、黙っていればだが
な。

また景色が……

「イテエ！　なんでだ!？」

「いま失礼なことを考えていたじゃろう」

なんつー勘の鋭い……

「それでじゃ、どうすればいいと思っつ？」

「今のままじゃ騙せるのはせいぜい変態ロリコンやろっくらいだ」

「おぬしを騙してもものう」

「いや、うるさいから。言っとくけど俺年上好きだし」

「と、いっつ？」

「25くらいかなあ……いや別に30代でも……じゃねえよ！
話しそれてるから」

何を話してんだよ俺は。

「……おぬしのその妙な性癖を直すためにも、へたれを直して度胸をつけるためにも、もちろんわしのためにもおぬしに一肌脱いでもらっしかあるまい」

「やれやれ、俺の裸をご所望か？」

「いや、おぬしにそんなもの求めておらん」

そんなもの言うな！

それよか妙な性癖ってまだロリコン疑惑晴れねえのかよ。まあへたれはいいだろう、事実だし……

「……冗談じゃ」

それはどの辺りからどの辺りまでが冗談という意味だ？

「まあ自分の事でもある。わしも自分なりに考えてみよう。だからおぬしにも協力してもらえると助かるのじゃが」

「……どうした？ まともなことを言うじゃないか」

「お願いできるかの？」

「しかたねえな、やってみよう」

「言ったな？ 先日おぬしは男に一言はないと言ったはずじゃ。是が非でも連れてきてもらっぞぞ」

ぐはあ……

やられた、これから男を騙そうって言ってたやつに、いきなり騙

された。しかもまだ小娘サイズのぺたん……ではなく幼い狐ごときに。

まさかこれがツンデレか？ 突然頼られるというハプニングに動揺していたのか俺はっ！

そういえば俺はさっきこんなことを言ってしまったはずだ。

『今のままじゃ騙せるのはせいぜい変態ロリコンやろつくらいだ』

やっちゃまったよ……

つか明日どうしよ。あんなやつ家に連れてこれるかなあ……

第3話：3日で無法地帯に

やれやれ、困った居候だ。

しかし約束してしまったのでは仕方がない、学校にでも行っていくか。

とはいかんど、俺は相当大事な用がない限り学校なぞ行かん！

「ええー！？ まだ引き籠もる気なの！？」

「母さん、引き籠もりはやめてくれ。それだと俺がまるで現代病の最先端にいるため人間のようだ」

「おぬし男に二言はないのではないのか？」

そんな武士道精神俺は持ってねーよ。

「中途半端な男じやのう」

「それが俺のモットーなんだよ」

何でもほどほどに、こつ見えても俺ががんばったらできるやつなんだ。

勉強だつてその気になれば学年トップは狙えるな。

「それと純弥、この子だね？」

「……………しまった！」

すっかり母さんとこいつを会わしてしまった。というか何で今の今までごく自然な感じだったんだよ！

「協力を誓い合った仲じゃ」

「ストップ！ 母さん、これは純粹に双方の利害が一致するかから協力しようと言う意味だからな？」

実質俺に利益ないけど。

「分かってるわよ、いくらなんでもねえ。こんな子をねえ、それ犯罪だからねえ」

「ほ、ほんとになあ……あっはっはっは……」

まじ危ねえ、これ以上この2人をセットで置いておくのはあまりにも危険だ。

すっかり俺が犯罪者にされかねない。

「で、結局この子はうちに泊まったりするの？」

「……ああ」

もうすでに3日たってます、とは死んでもいえないな。しかし3日たってしまったわけだ。これ以上なんか出てきたら、もはや対処のしようがねえな。

「おはよー……」

「おはよー」

「おはようじゃ」

「おはよー……って誰こいつ？」

「え？ 純也のお友達じゃないの？」

「というか朝から居ったぞ？」

「そんなわけあるかあ！」

俺の部屋からごくごく自然な感じで小学校……4年生くらいか？ それぐらいの少年が出てきて、俺たちの前を通り過ぎていった。なんかこいつも昔っぽい感じだが、この狐娘よりも庶民派な感じだったな。

謎の少年はトイレに入ったっぽかったけど、トイレの中は誰もいなかった。

「気持ち悪っ！ どこだよあのガキ！」

「いや、おぬしの横じゃが」

「まじ？ まじだっ！ どうなってるといつ！」

心臓止まるかと思っただぜ。一体なぜこんな子供が？ 多分凜香と同じだろうなあ。

「消えたっ！ どこだ？」

「おぬしの目の前じゃ」

「うそっ!?!? なんで?」

目の前にいるのに見失った……

「よし! 今は見えてる、動くな! 俺の前から消えるな!」

「……(ぼそぼそ)」

「なんか言ったか?」

ぼそぼそ言ってる聞き取れないんだけど。どんだけ声小さいんだよ。
よ。

「ぬら……」

「「ぬら?」」

何なんだこの謎のガキは?

「はっ! そうか」

「ん? 何か分かったか凛香?」

「おぬし、ロリコンな上にシヨタまで「そこはいいだろ! てい
うかどっちでもねえ!」

「……(ぼそぼそ)」

「はあー……しかたねえ。飯にするか、こいつも居候なんだし、一緒に食つたら」

「素晴らしい適応能力じゃな」

「あきれてるんだよ」

母さんはこの場でもっともパニックになるかと思われていたが、せつせと5人分の朝食を作っていた。

……5人分？ この影の薄すぎるガキをカウントに入れても、親父はいねえから、俺と母さんと凜香とガキで4人分のはずだが。

「おう！ 飯の良い匂いがするじゃねえか！」

「誰だよめえ！！」

「ごつい男がいきなり家族団らんの、まあ2名居候の空間に踏み込んできやがった。」

「しかもこの野郎、ガタイの良い男がネコミミなんかしゃがって気色悪いにもほどがある。」

「いや、あの耳頭にくっついてる。」

「誰だよめえ！！」

「なぜ2回目？」

「一回目とは意味合いが違う！」

「こいつは昨日の夜中からおるぞ」

「何だよ！」

まさかこいつも凜香と同じあれか？ 小さいガキに、小娘までなら許容範囲ギリギリだったが、リアルネコミミつきのかついおっさんとか、無理だろ！

「あら虎さん、起きてたの？」

「なぜ俺より先に母さんがお近づきに？ とうかこいつ虎かよ」

「いや、三毛猫の猫又だ。それもレアもののオスの三毛だ」

「知らねーよ」

珍しいならペットショップに売るぞこのやろつ。もしくは普通にテレビに突き出すか警察に突き出してもいいぞ。

「なんじゃおぬし？ 相手がこのような男だとずいぶん態度が違

うのつ」

「当たり前だ。見た目は重要なんだよ」

「ここまで猫っぽくない猫又は始めて見た。本物見たことないけどな。」

「ガハハ！ 三毛でも夜は虎になるぞ？」

「……………（ポッ）」

「てめえ！ それで虎か！ 殺す！ その3色の毛を赤一色にしてやるから迅速に頭を差し出せ！」

逃げたか、猫のような逃げ足だ……

しかしどうなってる、いつの間にかの家はここまでの無法地帯になっただんだ？

第4話：あきらめが肝心、何よりも

「いつになれば学校に行くというのじゃ」

「……行かないのはお前らのせいでもあるんだが」

「なぜじゃ？」

凜香は朝食の味噌汁を片手に俺の答えを待つ。どうも本当に分からないらしい。

「こんな怪しい連中が3人もいる状況で、唯一まともな俺が家を出るとどうなると思う？」

「それはそれは平和になる」

平和な脳みその持ち主だな。今でこれだけ無法地帯なんだ、俺が抜けたその日にはもう……

Chaos！ 全てが混沌となり、完全無秩序な世界になるだろう。というか現状、家に友達一人連れてくることは不可能だ。

「おぬし、学び舎から男を欺く術を持った女人を」

「無理無理、一般人にこんなの見せれるか」

「わしは尻尾を隠せばよからう」

「そう、凜香はまだどうにかなる。この謎のガキである……とり

あえず、ぬらでいいだろ。こいつはえたいが知れんが、見た目は普通の少年といった感じだ」

「なら俺は「てめえが問題なんだよ！」

ネコミミ？ そこじゃねえよ、俺の家におっさんがいることが問題だっていうことだよ。ほとんどのクラスの連中は、親父が家にならないこと知ってるからな。

「本当にミケには厳しいのうおぬし」

「当然だ」

「俺がお前の父親代わりに「ならなくていいから死んでくれ」

洒落にならねえよ、あと親父死んでないからな。今もどこかで仕事してるからな。

「いいかてめえ！ うちにいることはもういいが、常に帽子をかぶっている。じゃねえと耳と尻尾切り落とすから」

「オーケー了解だ」

おっさん、改め居候のミケ。どこからか帽子を調達してきてかぶった。なぜ麦藁帽子をチョイス？ いや似合うけどさ。そのいかついガタイに、いかつい顔、立派な眉毛に三食の短髪。白いシャツに短パン麦藁帽子。稲の収穫してこいよ。

ピョコン、というかわいくも鬱陶しい音とともに、麦藁帽子を耳がつかぬく。

「どんな耳!?!」

「すまん、こいつを隠すのは無理だったぜ」

「はあー、ミケはもういいよ。ただまあそれだと飾りの耳に見えなくもないし、それ被っとけよ」

それでぬらはどこだ?

「おいぬらー」

「おぬしの横じゃ」

「うおっ! 影薄すぎ!」

「影が薄いのではない、その子の術じゃ」

「わざとやってんのかよ!」

とんだいたずら小僧だ。

「……ぬらりひょん」

「分かってたけどお前も妖怪か」

もう驚きがないな。

確かぬらりひょんは、人の家に勝手のお邪魔して、勝手に飯を食う妖怪だったかな。図鑑では頭が後ろに長かったけど、本物はそうでもないのか。

まあこいつはぬらでいいだろ。

「ぬらは消えるの禁止」

「……………分かった」

「しかしぬらりひょんつてのも性質の悪い妖怪なんだな」

「……………僕の術は……………まだまだ未完成」

「完成したらどうなるんだよ……………」

「……………どれだけ込み合った会場でも……………目当ての物まで一直線……………割り込みし放題」

性質悪すぎだろ、とかどいつもこいつもなんか妙なところで現代人っぽいな。俺の気のせいかな？

「もういいや。飯が冷める」

思うことは山ほどある。だが全部言っていると俺の寿命が尽きるので、あきらめて受け入れてしまおうことにしよう。これ以上ほんと誰も来るなよ？

という俺の願いは通じたようで、これからしばらくの間、俺の部屋で新たな超常現象は起きないで、人外の居候3人と、俺と母さんの5人での共同生活が続くことになる。

第5話：それは困る

「……………んん、つくしよん！」

鼻がむずむずする、誰かが俺のうわさをしてるのか？ こんな夜中に、ふざけるなよ。

と、思ったら違った。これ凜香の尻尾か。どこで寝てるんだよ……………

「何でわざわざ俺の横で寝てるんだよ……………」

俺の部屋はただっ広い。それはもう普通じゃない、柔道の稽古だつてできるぜ。

それなのに、わざわざ遠くに敷いた布団から抜け出して、俺の布団までやってきて寝ている。一体全体どうしたというのだ、まさか暗いのが怖いのか？

でもこいつ妖怪だしそれはないか。

……………まさか俺の命が狙いか！？

「まさかなあ……………」

そんなわけないか。

「……………夜這い？」

「違う！ むしろ俺が被害者だ」

ぬらりひょん、通称ぬら。本名があるのかどうかなど不明。こいつは前触れなく出現するから困ったものだ。

「そういえばぬらは寝てないのか？」

「……寝てる」

「いつだよ」

「……時間の感覚は、人間と違う。人間ほど睡眠を必要としない」

「へえー」

まあそれが当然といえれば当然か。人っぽいけど、こいつは俺とは違う生き物だからな。

「……んっ……」

「起きたか？」

「……いや、寝てる。でも、眠りは浅い」

なんだか尻尾が活発に動いている。何か楽しい夢でも見ているのか？ まったく犬みたいだ。

しかし、俺の布団に勝手に忍び込んできて、勝手に目を覚まして、勝手にキレられてもいい迷惑ではあるな。

「よし、こいつを元の場所に戻そう」

「……なぜ？」

「寝れないじゃないか」

「……凜香の布団で寝ればいい」

「それはー……だめだろ、それにいやだ」

だが運んでいる途中で目を覚まして、キレられてもこれまた迷惑だ。こっちは親切心と、俺の睡眠時間のためにやってるのに。

「……なるほど、でも……注意するべき」

「何にだよ」

「……子供でも妖狐の力は……寝返りで人間1人殺しかねない……」

「……っ!」

そ、それはびびるなあ。こいつは寝返りで俺を殺せちゃうの？
何時間ぐらいこいつと寝てたのか知らんけど、やっべえ、ギリギリの綱渡りだったんじゃないか……しかも望まない綱渡りだ。

「ぬら、手伝って……いない！ ちくしょう便利な術だな!」

こうなったら一人でやるか？

いや、冷静に考えたら、俺は死ぬくらいなら畳の上で寝れなくもない。しかし俺の布団でこいつが寝てるというのがなあ、どう解釈されるか分からん。母さんに。

「運べば死に、ほっとけば社会的に死ぬ。理不尽だ……」

布団ごと持ち上げてやるつ。
結構軽いし大丈夫そうだ。

「……んんっ」

「起きたか？」

直後、俺は後方に吹き飛んだ。部屋が狭かったら壁に当たってる。これが寝返りか、油断ならねえ。

「相変わらずのパワーだけど、今ので起きないんだろ？」

吹き飛んだひょうしに、持ち上げていた布団を凜香ごと畳に落としたのだが、まったく起きる気配がない。

「よし、だったら布団ごと引っ張っていこう」

持ち上げるのはやめて、布団ごと畳の上を引きずっていく。

こっちのほうは作業は速く進んで、凜香の布団のすぐ横に俺の布団をつけることに成功した。後はこいつをコロンといけば、ミッシェンコンプリート。

なのだが、尻尾が邪魔でうまいこと転がらない。

突然、部屋の扉が開いた。

「っ！ 母さんが……？」

「……………」

ミケだった、このやるういびきをかきながら俺の部屋に侵入してきやがった。

しかもふらふらとこっちに歩いてきやがる。これはちょっとまずい、何をやらかすか分からない。油断はできないな。

……消えた？

直後後頭部に衝撃が。視界がぐらつく……

「……安心……しろ……手加減……して……ぐー」

「くそっ……最悪のタイミングだっ……」

後頭部に手刀。こいつ相当の達人だ、しかし何の夢を見てたんだ？ それにしてもまずい。このままだと、凜香の横でぐっすりだ。

「ぐえっ！……てめ……」

「ぐー」

俺の上ののっかかってきやがった。

もうだめ、あきらめた。

朝日が差し込んできた。ちょっとまぶしい。

どういつわけか体に異常を感じないのは、ここが天国だからなのか？ いや異常が無いわけではないな、汗臭い上に重たい。どう考えても昨日の夜のまま、ミケが俺に乗っている。

「おぬし……ホモなうえにそのようないかつい男を……」

「ストップ！ 言い訳させる！ それだけは、その勘違いは困る！」

「……お、朝か。しっかしすごかったなあ」

「すごかったって……まさか……おぬしら……」

「ちがーう！ ミケこのやるういい加減なこと言うな！」

「いい加減って言われてもなあ。俺の秘技がまるで通じなかったんだぜ、だがまあ最後はあっさりこいつで終わりよ！」

そう言ってミケは手で刀を持つようにして、振るう。手首をひねっていることから、峰打ちということなのか。合点がいった。こいつ夢の話してる。

「手で……？ おぬしらそういう関係……？」

「いらん勘違いを……だからなあ」

ここから事情を説明するのに1時間かかった。

凜香はどうも、すぐ横に俺がいたことよりも、俺の上にミケが乗っていたことの衝撃が大きすぎたようで横で寝ていたことについては何も言わなかった。

……なんか毎日大切なものを一つずつ失っている気がする。

第6話・持つべきは親友

「学校でもいくか！」

「いつてらっしやい純弥」

「悪い、嘘だ母さん。言ってみただけ」

今昼間だから、今から学校行っても何しに来たの？ って言われちゃう。学食で昼飯食いにきたって言うしかなくなる。

ん、そういえば最近学食に顔を出していない。確か今日は……スイーツの日じゃないか。

「やべえ、まじで学食いこつかな」

「？」

母さんには通じないか、だが俺の通う高等学校の学食には、月に一度のスイーツの日があり、その日はプロのパティシエによるオリジナルスイーツがメニューに並ぶのだ。

俺が学校に行く数少ない用事のうちのひとつだが、最近忙しくてすっかり忘れていた。

「うーん、学校行こつかなあ……」

今から行ってももう行列だろうしなあ……行列なあ。

「ぬらがあるじゃねえか」

「……」

「お、居たのか。だったら話は早い。て、こらこら。めんどくさいって顔するな」

「……めんどくさい」

「めんどくさいって言うな。お前の分も買ってやるから」

「本当かつ!?!」

「悪いが凜香に言った覚えは無い……て、ああ！ 泣きそうな顔するな！ 買ってくるから！」

女の子って言うのはズルイ気がする。こいつのは演技だと知っているんだけどな。

「おう、俺も頼める「だめだ」

逆におっさんは不憫なもんだな。誰がお前の頼みを聞くものか。しょんぼりしても無駄だぞ。

さて、学食でスイーツが食いたくてわざわざ昼から通学するといふのも、まあありだろ。妖怪一人まで連れて行くという計画的なところもだ。

「……行くなんて言ってない」

「そこをお願いします!」

とにかくぬらを口説き落とすことができたので、ぬらと2人で学校を目指す。

目標はスイーツを3人前。残っていると助かるな。

そして学校、うむ懐かしき校舎よ。

「お前と居ると誰にも気づかれねえな」

生徒から教師まで全ての人にシカトされるといって徹底ぶり。これがぬらの能力じゃなかったら泣きそうになるな。

「……スカートめくってもばれないよ」

「バカやろう！ そんなことするかよっ！」

「……なんで屈んでるの？」

バカやろう、避難訓練に決まっているじゃないか。

「おー純弥。一人で避難訓練か？ それとも女子のスカートの中でも覗いてるのか？」

「バカっ！ ちげーよ！」

つか、なぜ話しかけられたんだ？ ぬらもずっと横に居るから、普通はばれないはずなんだけど。こいつはゴルゴなのか？

いや、ゴルゴではない。クラスメートの双葉薫だ。俺より長身で、俺よりイケメン。俺よりまじめに学校に通っている男だ。

「……で、そのちっさい子は？」

「弟だ」

「は？ お前一人っ子だろ？」

「義理のな」

どんな嘘だよ、これギリギリだったな。こいつは俺の家族構成は把握しててなんだった。迂闊だったな。動揺を隠しきれただけでもよしとするか。

「なんだ、薫もスイーツが目当てか？」

「まあそうだが、お前もなら残念だったな」

「何がだよ」

「ソールドアウト」

「なんだとっ！？」

早い、想定外だ。せっかくここまで来たのに、今日のスイーツはなんだったんだよ。

「特製プリン。俺は買えたが「譲れ」

「……断固拒否する」

「5個も持つてるだろ」

「悪いがこればかりは純弥の頼みでも譲れんな」

ちっ、親友だと思っていたが。こうなれば強硬手段に出るしかないな。

「（いけ、ぬら）」

「（……能力を破られたのは初めてだ）」

「（え？　じゃあ無理かよ）」

「（……舐めるな……）」

ぬらが、完全に消えた！？　これが本気か……！

「じゃあな、アディオス！」

「お、おう。アディオス」

手の中のプリンが消滅したことに気づかない哀れな薫、ありがとう。やっぱりお前は俺の親友だ。

さて、目標のブツは手に入ったことだから、後は家に帰ってゆっくりといただくしよう。

「帰るか、ぬら」

「っ！ ……分かった」

何をびっくりしてるんだよ、いっつも俺がびっくりさせられてるのに。いきなり話しかけたからか？

まあいいや。帰ってプリンをいただくか。

そして校門にて、俺の前に立ちほだかる男がいた。名前は双葉薫。何を隠そう俺の親友だ。

「おう薫。どうした？」

「どうしたじゃねえよ。そのプリン、返してもらおうか」

めんどくさい男だ、気づいていたとはな。だがこっちにはぬらがいる、悪いが逃げさせてもらう。

「ぬら」

「……承知。……調和」

よし、ぬらが消えた。後は薫をどうにかしてくれるから、このプリンを持って家まで帰るだけ。

……あれ？ プリンはどこだ。

「プリンをどこに隠したア！」

「し、知らねエー！」

は、図ったな！　ぬらめ！

やばいぞ、こいつめちやくちや強いんだけど……

そして、俺は久しぶりに血を見た。やっぱり学校なんて行くものじゃないな。俺は反省した。

別に血も見えてないして、制服も綺麗なままに全速力で逃げてきただけけど、とりあえずぬらに腹が立つので、復讐を誓いつつ玄関をたたいた。

「おかえりー、気が利くわねー。わざわざ全員分用意してくれるなんて」

母さんが笑顔で出迎えてくれた。

「なんだかんだ、お前いいやつだなあー」

ミケにいたっては泣いてやがる。

「うむ、ありがたい。早くいただこうぞ」

凜香はテーブルにスタンバイしている。いつでもプリンにかぶりつける状態だ。そしてプリンを今並べているガキンチョは、

「……………計算どおり」

親指を突き立てて、無表情ながら自慢げな表情で俺を見ている。
計算どおりだと？

「ふざけるなあ！」

その日は荒れた。しかしプリンはつまかった。

第7話：点数じゃない大事なこと

『それで、藤くんは卒業する気ある？』

「今すぐでも卒業しますけど」

担任から電話がかかってきた。電話で担任と話すのは、学級閉鎖の時ぐらいしかなかったが、今日はそれよりもどうも大変な用事らしい。

俺は初っ端からそんなことを聞かれるから、卒業させてくれるのかと思いきや、予想外の言葉を聞くことになった。

『留年するよ？』

「先生、あの写真ばら撒いちゃうよ？」

『そつ！ それは勘弁……てその写真って何？』

「先生が体育教諭と密会を」

『してません！ とにかく授業に出なさい』

まずい、本当にこれは担任と校長の弱みを握らないと……

「テストっていつ？」

『明後日』

知らなかった。期末テストの期日を知らないなんて、これは失敗

だった。

「明後日は行くんで、保健室に準備してもらえますか？」

『何で保健室なの？』

「病気持って行くから」

『ああ……うん分かったわ』

「何ですかそのリアクション？」

本気で俺が現代病の最先端であるかのようなリアクション。心外だ。別に対人恐怖症ではないし、自宅警備という誉れある職についているわけでもない。

「純弥、ついに学校に行くのね」

リビングから俺のことを心配そうに見ていた母さん。まじで俺のことなんだと思ってるの？学校くらいめんどくさいけど行くときは行くから。

「さくつとテスト終わらしたら帰ってくるから」

「そういうセリフをあの人からも聞きたかったわ……」

「帰ってこねえな父さん」

一応仕事でどっか行ってるだけで、ちゃんと生活費も振り込んでくるんだけど、どこにいるのか不明で、連絡すら取ることができな

いというのが俺の父親である藤恭弥。

時々生活費が振り込まれなかったりする、だがごくごく稀に電話がある。正直俺はあまりこの人を父さんだと思っていない。

思える機会が少なかった。母さんとずっと2人だったからな。

「こんな綺麗な奥さんおいてなあ……」

「その通りよねえ」

言った自分で吐き気が止まらない、しかし母さんもそれが当然であるかのように流すんじゃねえよ。

だがまああなたが間違いでもないだろう。うちの母さんは、ご近所でも若くて綺麗な奥さんで通っている。息子としては微妙なところだが、悪い気はしない。吐き気はするけどな。

名誉のために言うが、ロリ好きでシヨタでマザコンだなんていうことは無い。

「いい息子さんじゃのう……」

「何でてめえが感極まってるんだよ」

凜香が泣き真似をしている。感極まってもいなかった。

「純弥はテストとやらは大丈夫なのか？」

「ああ、俺は中学3年間で高3までの全教科全単元予習してるんだ」

「嘘っぱいのう」

「といつか嘘よね」

凜香に疑われて母さんには完全否定される。確かに嘘だけど、別に全部嘘ってわけじゃないさ。

自分で言うのもなんだが、俺は数学が結構得意だ。正直高2の内容くらい余裕だ。

そしてとある事情で英語が話せる。国語も苦手じゃないし、理科は好きな教科であるからパソコン等活用して勉強している。捨てた社会科分を他で補うだけだ。

「ま、明後日まで時間あるし、テスト勉強するか」

「いいくに作るっ」

「作れば」

「……ぐすっ」

「ごめん母さん！　つか泣くなよ……分かったから。鎌倉幕府」

「そんな感じでよいならわしにも案があるぞ」

「いや凜香、こんな感じじゃダメだからな」

「いちごぱんつの光秀じゃ」

「聞きゃしねえ……てかなんだそりゃ！」

いちごぱんつ……1582、ああなるほど。なるほどだけど、妖

怪の狐の女の子が真つ先に持ち出すネタでもなかっただろ。

まあ語呂はいいし使わせてもらおう。いちごぱんつの光秀。本能寺の変のことだな。光秀もまさかこんなことになあ……

「光秀は変態だったみたいじゃのう」

「そんなこといつちやダメ！ これ年号の覚え方でしかないから」

「いやにいい日本地図」

「素直に褒めてやれよ」

1821年でいやにいい、いやにいい日本地図って、伊能さんがんばって歩き回ったのになあ。

「よい子の凜香じゃ」

「しらねーよ、自分を褒めてどうするんだよ」

「わしの誕生日じゃ」

「4月15日？ そついえばお前何歳なの？」

「っ！ 女の歳を詮索するでない！」

「ええ？ す、すまん」

なんか怒られて謝ってしまった。誕生日が4月15日、なんかプレゼントでも……まあだいぶ先だけだな。

「ええーつと、1549年「フランシスコザビエル！」

「……母さん、クイズじゃないよ」

それに別にフランシスコザビエルがメインじゃなくて、あくまでキリスト教伝来。まあ中心人物だから正解といえは正解だろうけど。勉強つてつまらないな。というかこれ勉強？ 勉強か勉強でないか、はつきりさせると勉強じゃないかもしれないな。

「まあいいけど。そろそろテスト勉強始めるか」

「今までの何だったの……？」

「遊び？ だって日本史テストの範囲じゃないし」

「なにっ！ では純弥。いちごぱんつの光秀は……」

「ああ、あのネタは傑作だったからいただいとくわ」

まあそろそろ本気でテスト勉強しようかな。その前にこんなのが2人も部屋にいたら、はかどる勉強もはかどらないのは目に見える。
いる。

俺の部屋からは出て行ってもらおう。

「じゃあ勉強するし、出てって」

「手伝う……」

「いらん」

「わ、わしは？」

「当然いらん」

2人を部屋から追い出して、全ての戸を閉める。だだっ広い部屋がものすごく寂しくなった。うん、懐かしいこの感じもたまには悪くも無いな。

俺は、真剣にテスト勉強を始めた。

「やる気はある、でも集中できないな」

ペンを置いた。ちなみに真剣宣言からようやく1時間がたつといところだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067i/>

居候って.....可愛いか？

2010年10月11日20時47分発行